

『それから』の庭

——崩壊する代助の〈閉ざされた庭〉——

一・庭

ニハ（ニワ）ということばのニというのは土のことであるという。埴生（ハニユウ）とか埴輪（ハニワ）のハ二というのは陶器をつくる黄赤色の土のことである。ハ二というのは場のことで、ニハというのは、土場のことだといわれている。庭には、木や石または花の庭園というよりも、ずっと広い意味があつたわけである。^{注1}

海野弘はこう記して、庭という空間を、「木や石または花」によってうまれる自然空間、もしくは単なる自然観賞としての存在だけではない、もっと豊かな空間として捉え

山 本 真 由 美

ている。

たしかに庭は、静止した拵（かたち）だけでなく、たとえばそこが祭りの場となったり、または舞台となることがある。庭という空間には、動的な場としての機能も備わっており、さらに、茶室が登場する桃山期から現われたのではないかとされる秘密の庭園、ヨーロッパにおける〈閉ざされた庭〉のような庭も存在する。そして、詩的・文化的メッセージを伝える機能をも担い、庭園でさえ、そこに何らかの注意を喚起させる。

時代・地域により、庭が伝えうる機能は変質していくが、庭という空間のもつ機能は深遠である。

一方、そのような庭との遭遇・体験を、海野は次のようにも述べている。

人は名庭を拝見に行った時だけ、精神的、芸術的になるのであろうか。もし庭を見ることが、緊張のほどけた、気楽な息のようなものだとするなら、その体験は特別なものというよりは、もっと基本的で、なにげなくあるものではないだろうか。つまり、私たちはのんびりと呼吸をするように、どこにおいても、庭という安らぎの空間を見ることができるのである。庭とは、庭園としてガイドブックにのっているだけではなく、いたるところに見出すことができるものである。または、いかなる空間も庭へ変換することが可能な^{注2}だ。

庭は、人がその目的・趣向に応じて「いたるところに見出すことができ」、また創りあげることのできる空間であり、「いかなる空間も庭へ変換すること」が、独自の庭へ変換することが可能なのである。庭という空間は、それがもつ機能の深遠さゆえに、さまざまな姿を、さまざまな意味を伴って見せることのできる空間である。

そこで、文学テキストに現われている〈庭〉について、考えてみたい。

もちろん前述したように、庭は詩的・文化的、または政治的メッセージをも伝えることができるものであるから、文学テキストにおいても多彩なコードとして活躍しているで

あろうことは想像に難くない。

その機能を、夏目漱石の『それから』に登場する庭において探ってみたい。テキストに登場する庭からテキストを捉えてみると、『それから』がどのような一面を見せるのか探ってみたいのである。

従来『それから』には、植物が多く登場していることがしばしば指摘されてきている。^{注3}たとえば目にとまるものだけでも、冒頭の目覚めた代助の枕元に落ちていた八重の椿、代助が花粉を塗るアマランス、折れた葉を鋏で切った切口から緑の濃い重い汁を落とす君子蘭、枕元でその香りを嗅ぎながら代助が仮寝をする鈴蘭、代助と三千代がそれぞれに用意する百合、がある。

この植物たちが、注目されてしかるべく印象的にテキストに登場している理由は、これらが登場するタイミングにもある。八重の椿は冒頭、これからストーリーが展開していく始まりに登場し、その直後に平岡の端書と父からの封書が届く。代助がアマランスの花粉を付けている時には、平岡家に使いにやった書生の門野から、平岡がこの後訪ねてくることを聞く（実際に訪れたのは三千代であったが）。

そして、君子蘭の葉のなかに鼻を入れている時に平岡が訪ねてき、鈴蘭の香りのなかに仮寝をしている時に三千代が訪ねてくる。また百合は、三千代が代助を訪ねる時、代助

が三千代の兄を訪ねる時、そして三千代を迎える時に登場している。

二・緑の沈んだ庭

いずれも平岡と三千代の来訪の前触れ、もしくは付随物のように登場し、その存在を主張している。しかし印象的な理由はそれだけでなく、この植物たちが代助の行為を伴って、積極的に現われていることによるのである。つまり、これらの植物が登場人物と直接的に関わらない、背景または挿入描写として存在するのではなく、代助がそれらと関わることによって積極的な存在になっているからである。この植物たちはこれまで指摘されているように、象徴として記号として扱われる価値を十分に備えている。

本稿でとりあげる庭には、あいにくこれらの植物たちが生息しているわけではない。しかし、庭を単なる自然としてだけ捉えない本稿の視点からは、同じ自然というカテゴリーによって庭と植物を必然的に結びつける意志はなく、植物も念頭におきながら論を進めていく。

『それから』には、三つの庭、代助の〈庭〉・長井の〈庭〉・平岡の〈庭〉、が登場している。本稿では、代助の〈庭〉を中心として分析していくこととする。

『それから』の代助は、大学を卒業してからも高等遊民として家の援助のもと独立した居を構え、生活上は何の不自由もなく、自らが認める美と美意識を愛し、芸術的生活を送っている。しかし過敏な頭脳と神経を持つがゆえに、代助は自らを「病氣」とであると評している。

そして旧友の平岡が、赴任していた京阪地方から東京へ戻ってくることになり、ドラマが動きだす。端書による平岡常次郎という名前の提示、代助が写真帳にある女性の半身を見つめる行動、平岡との「ある事情」という書き方など、漱石テクストに特徴的なプロット、謎の組み立て方がここにも徐々に見られてきており、今後の展開を期待させている。

まずは平岡の名前、次に平岡自身が登場しドラマが動きだしたことによって、代助に変化が生じてくる。それを示す一つに長井家の欄間の画がある。長井家に立て増した客間は、代助の意匠に基づいて専門家へ注文したものであるが、ことに欄間の周囲に張った装飾画は、知人の画家に頼んで出来あがった殊更に興味の深いものである。その装飾画が、代助に「どう云ふものか、此前来て見た時よりは、

痛く見劣りがする」ようになるのだ。これは代助の変化を物語るサインの一つである。その後、代助は頭のなかでその画の「下手な個所々々を悉く塗り更へて、とう／＼自分の想像し得る限りの尤も美しい色彩」に変えてしまふ。

平岡夫妻との再会、父から持ちかけられる因縁のある縁談、この二つが同時進行していくにつれ、代助の身体と心情は揺らいでくる。そのなか、彼が安定を求めるのが、自ら住まう家の庭である。

代助は縁側へ出て、庭から先にはびこる一面の青いものを見た。花はいつしか散つて、今は新芽若葉の初期である。はなやかな緑がぱつと顔に吹き付けた様な心持ちがした。眼を醒す刺激の底に何所か沈んだ調子のあるのを嬉しく思ひながら、鳥打帽を被つて、銘仙の不断着の儘門を出た。

〈五〉

（傍線筆者・以下同）

〈五〉に登場する庭の描写である。この時はじめて、代助が庭を眺める仕草が表現されている。これより前に庭は一度登場している。〈二〉で、帰京した平岡が最初に代助宅を訪問した時である。『相変らずが一番好いな。あんま

り相変るものだから』そこで平岡は八の字を寄せて、庭の模様を眺め出したが、不意に語調を更へて」と話題が進んでいた。

その〈二〉から、この〈五〉の庭が登場するまでの間に、代助は嫂から縁談の話を聞き、平岡と三千代に一・二回会い、そのなかで三千代から借金依頼を受けている。

この〈五〉の庭の描写の直前に、代助が以前展覧会で見た青木画伯の絵についての感想がある。

いつかの展覧会に青木と云ふ人が海の底に立つてゐる背の高い女を画いた。代助は多くの出品のうちで、あれ丈が好い氣持に出来てゐると思つた。つまり、自分もあ、云ふ沈んだ落ち付いた情調に居りたかつたからである。

〈五〉

前述の庭の描写と共通しているのは、「沈んだ落ち付いた情調」といったものであり、この「沈んだ落ち付いた情調」と「緑」を好み求める代助の特徴は、その後もくり返し次のように語られている。

代助は何故ダヌンチオの様な刺激を受け易い人に、奮

興色とも見做し得べき程強烈な赤の必要があるだらうと不思議に感じた。代助自身は稲荷の鳥居を見ても余り好い心持はしない。出来得るならば、自分の頭丈でも可いから、緑のなかに漂はして安らかに眠りたい位である。

（五）

彼は此取り留めのない花やかな色調の反映として、三千代の事を思ひ出さざるを得なかつた。さうして其所にわが安住の地を見出した様な気がした。けれども其安住の地は、明らかに、彼の眼に映じて出なかつた。たゞ、かれの心の調子全体で、それを認めた丈であつた。従つて彼は三千代の顔や、容子や、言葉や、夫婦の關係や、病氣や、身分を一纏にしたものを、わが情調にしつくり合ふ対象として、発見したに過ぎなかつた。

（十一）

ダヌンチオの赤い部屋や、庭に咲く赤い花、平岡との会話や、佐川の娘をふくむ社交界の女性たちといった刺激と明るさに富む色や物、人、出来事、そうしたものを代助が「好まない」ことについて、読者は度々くり返される否定的な表現によって印象づけられていく。

はじめて代助が庭を眺める仕草が表現され、また、

「緑」と「沈んだ落ち付いた情調」を好み求める代助が強調されはじめるのがこの（五）であることは、偶然ではないかもしれない。この庭が登場する（五）は、平岡と三千代が新宅に引越す日にあたっている。帰京した夫妻は、それまでの仮の宿屋から、書生の門野が探してきた家に、新たにこの日引越しているのである。そしてその同じ夜に、代助はある音を聴いている。

自分は昨夕寝つかれないで大変難儀したのである。例に依つて、枕の傍へ置いた袂時計が、大変大きな音を出す。夫が氣になつたので、手を延ばして、時計を枕の下へ押し込んだ。けれども音は依然として頭の中へ響いて来る。其音を聞きながら、つい、うと／＼する間に、凡ての外の意識は、全く暗窖の裡に降下した。が、たゞ独り夜を縫ふミシンの針丈が刻み足に頭の中を断えず通つてゐた事を自覺してゐた。所が其音が何時かりん／＼といふ虫の音に變つて、奇麗な玄関の傍の植込みの奥で鳴いてゐる様になつた。——代助は昨夕の夢を此所迄辿つて来て、睡眠と覚醒との間を繋ぐ一種の糸を発見した様な心持がした。

（五）

この夜、代助の意識は大きな袂時計の音に囚われ、その時計の音が頭に響きながら、やがて音を聴く意識以外は「全く暗窖の裡に降下」し、次には「夜を縫ふミシンの針」が「刻み足に頭の中を断えず通つてゐる。するとその音は玄関での虫の音へといつのまにか変わっていき、朝になつて目覚める。

音が漱石テクストの創作手法、戦略の一つであることはこれまでに論じてきたが、ここにも問題となる日・時に、その音が使われていることがうかがわれる。

三．閉ざされた庭

代助は父に呼ばれてから二三日の間、庭の隅に咲いた薔薇の花の赤いのを見るたびに、それが点々として眼を刺してならなかつた。其時は、いつでも、手水鉢の傍にある、擬宝珠の葉に眼を移した。……石榴の花は、薔薇よりも派手に且つ重苦しく見えた。緑の間にちらり／＼と光つて見える位、強い色を出してゐた。従つて是も代助の今の気分には相応らなかつた。

〈十〉

〈九〉で、代助は自分の縁談についてはじめて父から正式に話を聞く。これまでも数回縁談の話は出ているが、その相手はいつも嫂であり、代助は嫂を介してその話に接してきている。それが〈九〉ではじめて父の口から直接、代助に語られる。

そして続く〈十〉の引用部分の庭である。ここでも庭の赤い薔薇より擬宝珠の葉を好む代助が強調されているが、〈十〉ではさらにこの他に二回、庭が登場する。

代助が鈴蘭の香りのなかで仮寝をしている間に、三千代が訪ねてくる。そして、三千代が買い物を買済ませてからもう一度来訪すると聞かされた代助は、三千代を待つまでの間に庭を眺める。「頭を濡らして、縁側迄歸つて来て、庭を眺めてゐると、前よりは気分が大分清々した。曇つた空を燕が二羽飛んでゐる様が大いに愉快に見えた」。

〈十〉にあつても代助の気分は「暗調を帯び」ており、さらに、これまでは「非常な神経質であるにも拘はらず、不安の念に襲はれる事は少なかつた」が、「夫が、何う云ふ具合か急に揺き出し」てきた。平岡の家をすんで訪問することも避けており、代助宅と平岡宅との境界といえる江戸川の橋まで向かつて、「橋の真中に立つて、欄干に頬杖を突いて」水の光を眺めるだけで、「橋を向へ渡つて、小石川の坂を上る事はやめにして帰る様になつ」ている。

そして、再び訪ねてきた三千代が、昔代助が菅沼の家に持っていった百合の花を掲げてき、その香りを嗅いでみせた時、「さう傍で嗅いぢや不可ない」と注意し、さらに無作法に百合を活けたため、三千代から「あなた、何時から此花が御嫌になつたの」と聞かれるほど、百合の強い香りのような刺激に堪えられないようになつてゐる。

この三千代の訪問のなかで、庭が現われる。

そのうち雨は益深くなつた。家を包んで遠い音が聴えた。門野が出て来て、少し寒い様ですな、硝子戸を閉めませうかと聞いた。硝子戸を引く間、二人は顔を揃えて庭の方を見てゐた。青い木の葉が悉く濡れて、静かな湿り気が、硝子越に代助の頭に吹き込んで来た。世の中の浮いてゐるものは残らず大地の上に落ち付いた様に見える。代助は久し振りで吾に返つた心持がした。

（十）

ここでの三千代との対面が特別な時であることは、雨によつて証明される。漱石テキストの雨については、蓮實重彦がその「符牒^{注5}」としての機能を論じている。蓮實に從えば、雨（または水）は漱石テキストにおいて、「物語に変化を導入する符牒」であり、「遭遇と決別の儀式」であり、

また「男と女を外界から孤立させるもの」でもあるが、さらにその雨による音が「家を包んで」^{注6} いることも、戦略である。^{注7}

ただし、ここで代助が求めているものは、「静かな湿り気」と「落ち付」きであつて、以前の三千代との記念としての百合の花ではないのである。この時の百合にまつわる二人の会話のすれ違いも、そのことを物語っている。

代助はこれまでも、欄間を眺めている間は三千代のことを「殆ど忘れて」いたり、君子蘭の葉のなかに鼻を入れている時も三千代のことを「丸で頭の中に考へてゐなかつた」りしている。深読みをすれば、息をはずませてやつて来た三千代が要求した代助の飲み残しであるコップの水を、彼が三千代へ与えずに庭へあけたのも、三千代との距離を示していると言えるかもしれない。海老井英次は、この場面を「一杯の水というよりも、一口の水を所望する三千代に對してとつた代助の反応は、愛という問題を考える上ですでに二人の間の決定的と言つてもよい隔たりを明らかにしてしまつてゐるのであり、作品の展開上でも重要な場面と位置付けられる」とし、三千代にとって「目の前に残されてゐた水こそ最も飲みたかつた水だったのであり、それは常識的には異常な行為かもしれないが、愛の行為としては決して不自然ではなかつたはずのものである。しかし、

代助はそういう意味での〈詩〉とは遠い男であった。三千代に即座にその場で応えることをし得ないで、新しい水を求めて台所へ姿を移した彼は、やはりいささか滑稽の感じを免れないのである」と論じているが、三千代には与えなかった飲みかけの水を、席を立てて縁へ出て庭にあける代助の行動には、彼の庭との共生は暗示されているかもしれない。そして、代助が新しい水を持って部屋に戻った時、すでに鈴蘭の入った鉢からコップで水を飲んだ後の三千代が、コップの中に代助が庭へあけたのと同じくらの水の量を残して手に持っていたのは、三千代は代助との共生を求めていることの暗示と言えるのかもしれない。

ところで、『それから』には代助の庭のほか、長井の庭、平岡の庭が登場することは先に述べた。ここで平岡の庭を見てみたい。

〈十〉での三千代の訪問の後、代助は「二三日、宅で調物をして庭先より外に眺めなかつた」り、以前注文していた丸善から届いた書物のことを、読書を重視するにもかかわらずすっかり忘れていたりしているが、その一方で、縁談の過程は、歌舞伎座での佐川の娘との対面、長井家での会食、出立の見送り、と徐々に進められている。そして代助は口実を拵え、「とう／＼又三千代に逢ひに行」く。その時平岡の庭が、次のように描写されている。

土の和れない庭の色が黄色に光る所に、長い草が見苦しく生えた。

代助は又忙がしい所を、邪魔に来て済まないといふ様な尋常な云訳を述べながら、此無趣味な庭を眺めた。

〈十三〉

代助が訪ねた時、三千代はあまりに退屈だから張物をしていたところだと言い、先日代助から渡されたお金で質屋から戻した真珠の指輪を彼に見せた。しかし代助は指輪については何事も語らず、庭の方を見て言う。

「そんなに閑なら、庭の草でも取つたら、何うです」と云つた。すると今度は三千代の方が黙つて仕舞つた。

〈十三〉

この三千代の沈黙は、二人の記念である真珠の指輪と、それを質屋から取り戻すためのお金を代助が三千代に与えたという秘密を、三千代が代助と自分との密やかな絆と思っていたにもかかわらず、指輪を見せた時に代助がそれに応えなかったことに対する失望からであろう。しかし庭の視点からすると、留守がちな平岡の居ない時間をもてあまし、二回も新聞を読み直したり、張物をしている三千代

が、見苦しく長い草の生えた庭の手入れをしないのは、体力的な理由もあろうが、三千代の庭に対する関心の薄さ、庭に思いを込める気持ちを持っていない三千代と代助の距離感を思わせもする。

そして、もう一つの長井の庭であるが、長井の庭は、代助が長井家を訪問した際にしばしば描写されている。そのなかめずらしく嫂が庭を眺める描写がある。

座敷には梅子が新聞を膝の上へ乗せて、込み入った庭の緑をばんやり眺めてゐた。是もぽかと眠さうであつた。……

「兄さんは何うしました」と聞いた。梅子はすぐ此陳腐な質問に答へる義務がないかの如く、しばらく縁鼻に立つて、庭を眺めてゐたが、
「二三日の雨で、苔の色が悉皆出た事」と平生に似合はぬ観察をして、故の席に返つた。

〈十四〉

代助はこの日、父に縁談を断ろうと決心し長井家へ向かつた。すると嫂は庭を眺めていた。このめずらしい様子を入り口に、代助は嫂とのやり取りのなかで佐川の娘との縁談を断ることを伝える。代助がこの縁談の話を最初に聞

いたのは嫂からであり、また最初に断る決心を話したのも嫂であつた。代助が縁談を断りに行つた日に、嫂が庭を眺めているのは、庭の使用を意識する本稿の立場からすれば暗示的な設定である。

そしてその日の夜から「強く雨が降り出した。釣つてある蚊帳が、却つて寒く見える位な音がどう／＼と家を包んだ。代助は其音の中に夜の明けるのを待つた」。

雨は翌日まで晴れないまま、代助は自宅に三千代を呼んで自らの心情を告白することを決め、百合の花を買いに行き部屋に飾る。部屋は雨と百合の香りに封じ込められ、そのうちで代助は三千代に告白を果たす。三千代が帰つた後、その告白は次のように締めくくられている。

雨は夕方歇んで、夜に入つたら、雲がしきりに飛んだ。其中洗つた様な月が出た。代助は光を浴びる庭の濡葉を長い間縁側から眺めてゐたが、仕舞に下駄を穿いて下へ降りた。固より広い庭でない上に立木の数が存外多いので、代助の歩く積はたんと無かつた。代助は其真中に立つて、大きな空を仰いだ。やがて、座敷から、昼間買つた百合の花を取つて来て、自分の周囲に蒔き散らした。

白い花弁が点々として月の光に冴えた。あるものは、木下闇に仄めいた。代助は何をするともなく其間に曲んで

ゐた。

寝る時になつて始めて再び座敷へ上がった。室の中は花の香がまだ全く抜けてゐなかつた。

〈十四〉

三千代への告白の後、代助は下駄を履いて庭へ降りていく。それまでの代助は庭を眺めていることのみで、庭へ降りる仕草は、この時がはじめてである。代助は告白の後「固より三千代を独り返す気はなかつた」と思いながら、「平岡の家迄附いて行く所を、江戸川の橋の上で別れ」ている。平岡の家までついて行かない事実が、代助の揺らぎを示し、それゆゑ代助は庭へ降りることになるのである。そして自らの告白を浄化するために、三千代への告白を取りまいていた百合の花を庭へまき散らし、「其間に曲」む。代助が求めているものは、ここでも百合の花ではなく、その庭なのである。彼は告白を果たした部屋のみで、百合の花と香りと共にたたずむことはなく、庭へと回帰していく。

数日後、代助は父に会つて佐川の娘との縁談を断り、父からもう世話はしないことを宣告される。縁談を断れば父からの援助が途絶えることは予想されていたことではあるが、三千代に告白した後の平岡と自分との将来について

「具体的な案は一つも準備」しておらず、また社会に対しても「何の考も纏め」ておらず、ただ「自分の世界の中心に立つて、左右前後を一応隈なく見渡し」納得していた代助は、目の前に迫った職業の必要、生活と精神の零落、三千代への責任に対し「惘然として黒内障に罹つた人の如くに自失した」。

代助は三千代が「静に落ち着」き、「微笑と光輝とに満ちて」いる様子に一層の苦しみを感じ、「何等の新しい路を開拓し得な」いまま、非常な暑さのもとで庭に水を打つことぐらしかできない。

夕方には庭に水を打つた。二人共跣足になつて、手桶を一杯宛持つて、無分別に其所等を濡らして歩いた。門野が隣の梧桐の天辺迄水にして御目かけると云つて、手桶の底を振り上げる拍子に、滑つて尻持を突いた。

〈十六〉

そして三千代を呼び寄せ、今後父からの援助が絶えることを話すと、三千代からそうなるのは最初からわかつていたはずだと指摘され、また「漂泊」も「死」をも覚悟している三千代を前に「慄然として戦」く。代助は、自分が平岡に会つて解決をつけることを三千代に話し、三千代は帰

宅するが、この時は三千代を送っていくことをしない。

代助は日の傾くのを待つて三千代を帰した。然し此前の時の様に送つては行かなかつた。一時間程書齋の中で蟬の声を聞いて暮した。三千代に遭つて自分の未来を打ち明けてから、気分が薩張りした。平岡へ手紙を書いて、会見の都合を聞き合せ様として、筆を持つて見たが、急に責任の重いのが苦になつて、拜啓以後を書き続ける勇氣が出なかつた。卒然、襦衣一枚になつて素足で庭へ飛び出した。三千代が帰る時は正体なく午睡をしてゐた門野が、

「まだ早いぢやありませんか。日が当つてゐますぜ」と云ひながら、坊主頭を両手で抑えて縁端にあらはれた代助は返事もせずに、庭の隅へ潜り込んで竹の落葉を前の方へ掃き出した。……狭い庭だけれども、土が乾いてゐるので、たつぷり濡らすには大分骨が折れた。

〈十六〉

近い将来訪れるであろう物質的困窮を三千代に打ち明け、代助は「気分が薩張りした」と思うものの、それは一瞬のこと過ぎず、彼は庭へ飛びだすことになる。それも「襦衣一枚」「素足」という、より庭に密着した状態で。代助

は庭を眺めるのでもなく、庭に降りるのでもなく、「卒然」、「襦衣一枚」「素足」というかたちで庭に飛びださなければならぬほど、切迫している。

三千代への告白を果たした夜、代助は下駄を履いて庭へ降りているが、その時以降、門野と水を打つ時も、平岡に手紙を書こうとしたこの時も、庭へ降りる時は常に素足であり、さらにそのレベルは進んでいる。三千代への告白以降、あきらかに彼の庭への身体的接触度、庭との密着感が高まつてきていると言える。

そしてその庭を、乾いた庭を、代助は「たつぷり濡らす」さずにはいられない。「緑」と「沈んだ落ち付いた情調」を備えた庭には、さらに水分による湿り気も必要となつた。三千代が百合の花を掲げて訪問した時の雨の庭のように、そして三千代へ告白を果たした時の雨の庭のように。それゆえ、代助は門野と庭に水を打つ行為を日課とすることになるのである。

乾いた庭を「たつぷり濡らす」ことで代助は落ちつきをえ、翌日の朝平岡に手紙を出すことができていたのであるが、待ち望む平岡からの返事はなかなか届かない。代助は庭に「水を打つ勇氣も失せ」、門野を平岡家に使いにやると、家に病人が出たということであつた。それを聞いた代助は、彼を苦しめていた長井家や職業に対して「度胸を据

ゑた」が、三千代の病気が頭を悩ませる。さらに、翌日の平岡との会見も彼の頭を刺激している。

平岡は明日の朝九時頃あんまり暑くないうちに来るといふ伝言であつた。代助は固より、平岡に向つて何う切り出さう杯と形式的の文句を考へる男ではなかつた。話す事は始めから極つてゐて、話す順序は其時の模様次第だから、決して心配にはならなかつたが、たゞ成る可く穩かに自分の思ふ事が向ふに徹する様にしたかつた。それで過度の興奮を忌んで、一夜の安静を切に冀つた。成るべく熟睡したいと心掛けて瞼を合せたが、生憎眼が冴えて昨夕よりは却つて寝苦しかつた。其内夏の夜がぼうと白み渡つて来た。代助は堪りかねて跳ね起きた。跣足で庭先へ飛び下りて冷たい露を存分に踏んだ。夫から又縁側の簾椅子に倚つて、日の出を待つてゐるうちに、うと／＼した。

〈十六〉

ここでも代助は「跣足」で庭へ飛び降り、「冷たい露」を「存分に踏ん」でいる。

そして訪れた平岡に、平岡夫妻が東京に帰ってからの自分と三千代とのこと、平岡と三千代が結婚した三年前のこと

を語り、平岡から絶交を言い渡され、三千代についてはその病が回復してから譲ることを言い渡される。

平岡への告白を果たすと、その日代助は平岡の住んでゐる町、平岡家の前をとりつかれたように何度も彷徨してゐる。「強い日に射付けられた頭が、海の様に動き始めた。立ち留まつてゐると、倒れさうになつた。歩き出すと、大地が大きな波紋を描いた。代助は苦しさを忍んで這ふ様に家へ帰つた。……恐るべき日は漸く落ちて、夜が次第に星の色を濃くした。代助は暗さと涼しさのうちに始めて蘇生つた。さうして頭を露に打たせながら、又三千代のある所迄遣つて来た」。

これまでの代助なら、その行く先は、彼の庭であつたはずである。代助の向かう先は、常にその庭であつた。しかし、平岡への告白をも果たしてしまつた代助は、もう庭によつて安定をえることはできない。崩壊しかかつてゐる家の、小さな閉空間である庭から、出て行かなければならぬのである。庭は代助の居るべき場所とはなりえないのだ。翌日、平岡からの手紙を受け取つた父の代理として兄が訪れ、絶縁を宣告された時も、代助は庭に向かうことはできない。

「門野さん。僕は一寸職業を探して来る」と云ふや否

や、鳥打帽を被つて、傘も指さずに日盛りの表へ飛び出した。

代助は暑い中を馳けない許に、急ぎ足に歩いた。日は代助の頭の上から真直に射下した。乾いた埃が、火の粉の様に彼の素足を包んだ。彼はちり／＼と焦る心持がした。……仕舞には世の中が真赤になつた。さうして、代助の頭を中心としてくるり／＼と燄の息を吹いて回転した。代助は自分の頭が焼け尽きる迄電車に乗つて行かうと決心した。

〈十七〉

代助の行く先は、庭ではない。彼は「日盛りの表へ飛び出」していく。もはや庭は、代助のオアシスでもユートピアでもなく、そこは彼の世界ではないのである。それゆえ、代助の身体は外へと向かい、また電車に乗っていくことになるのである。

『それから』に登場する代助の〈庭〉と代助とのかかわりを追ってきた。

代助が愛していたのは、何よりもその庭であつたのかもしれない。庭に囲まれた彼であつたのかもしれない。庭は、代助の好み求める「緑」と「沈んだ落ち付いた情調」と水

分の湿り気を備え、彼が身体をゆだねる空間であつた。そして、代助が揺らぐたびに庭への回帰がくり返された。代助にとつての庭は、彼の求めるものが回帰してくる場所であつたのかもしれない。

くわえてその庭は、きわめて閉塞的であり（もちろん門野がその庭に立ち入ることはあるが、門野は代助にとつて彼の家を構成する一部なのである）、それゆえ庭は代助にとつての〈閉ざされた庭〉となつた。そこは、外部との隔絶によつて成立する彼のためだけの空間となつていたのである。

しかし、今やその庭から、代助は出て行こうとする。外へと向かつた彼が、次に辿りつくのはどこであろう。詩人マーヴェルについて、川崎寿彦が次のように述べている。

いま、マーヴェルの〈庭〉という、〈小世界〉イメー
ジの崩壊を論じ終えたところである。あとの、醒めたマ
ーヴェルに、何が残つたか？ それはあのバミューダ島
の水夫たちが、黙々と、規則正しいリズムで、オールを
漕ぎ続けるような、そんな詩風であつた。また彼が、凡
庸なる世の為政者たちに期待したような、「規則正しい
歩調で謙虚に」歩み続ける、そんな詩風であつた。規範
からはずれるものをきびしく責める冷厳さはあつても、

それはもはや、静的恍惚とも、激動の陶酔とも、無縁であつた。^{注9}

ここに、庭から出て行った後の代助を、そして『門』の宗助の片鱗を、見ることはできないであろうか。

ただ、崩壊した代助の〈庭〉から、『門』の宗助が完全に飛びたつたわけではない。〈庭〉の崩壊後にマーヴェルに残った「黙々と、規則正しいリズムで、オールを漕ぎ続けるような、そんな詩風」、「規則正しい歩調で謙虚に」歩み続ける、そんな詩風」は、宗助の姿を想起させる。しかしその「詩風」をくり返す宗助を支えているお米との家は、実は代助の〈庭〉のヴァリエーションかもしれないのである。

注1 海野 弘『都市の庭、森の庭：未知なる庭園への旅』一

九八三 新潮社

2 1に同じ

3 浜野京子「〈自然の愛〉の両儀性——『それから』における〈花〉の問題——」（漱石作品論集成第6巻 それから一九九一 桜楓社）、木股知史「夏目漱石『それから』（『イメージの図像学 反転する視線』一九九二 白地社）、重松泰雄「〈文明批評〉のタブプロ——『それから

ら」解説——」（漱石 その歷程）一九九四 おうふう）等々多くの論がある。

4 拙稿「静かなドラマ『行人』——〈サウンドスケープ〉の可能性——」（『実践國文学』五〇 一九九六）、拙稿「廊下と階段の変奏 『三四郎』『草枕』『明暗』（『実践國文学』七四 二〇〇八）

5 蓮實重彦『夏目漱石論』一九七八 青土社

6 5に同じ

7 4に同じ

8 海老井英次「『それから』論——二つの「悪戯」を視座として——」（『文学論輯』三七 一九九二）

9 川崎寿彦『マーヴェルの庭』一九七四 研究社

（やまもと まゆみ・実践女子大学大学院博士後期課程）